療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフケア充実に向けての調査研究
－COVID-19流行の影響も踏まえて－

研究分担者　高梨　早苗　国立長寿医療研究センター　老人看護専門看護師・副看護師長

研究要旨
認知症者の EOL ケアの在り方について文献的考察を行った。その結果、支援者が多様な倫理的課題が存在していることを認識し、認知症者自身が医療やケアを選択することを前提に支援し、末期の認知症者にとって丁寧な日常生活援助が緩和ケアになることが明らかとなった。

A. 研究目的

本取り組みでは、療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフ（以下、EOL）ケア充実に向けての調査研究の基礎的資料として、EOLケアに精通した看護師として認知症者のEOLケアの在り方を文献的に考察する。

B．研究方法

文献選定にあたって、データベースとして医学中央雑誌Web（医中誌Web）を使用した。検索対象期間は,2012年以降とし、検索式は(認知症者/AL and (ターミナルケア/TH or エンドオブライフケア/AL)) and (DT=2012:2022 PT=原著論文,会議録除く)とした。

文献選定の結果、16件が選定され、内容を確認し、13件を検討対象とした。

（倫理面への配慮）

文献を取り扱う際には、著作権を侵害することがないよう配慮した。

C．研究結果

13件の文献は、「EOLケアにおける家族満足度と職員によるケア評価に関する調査」「終末期医療に対する意向調査と家族介護者との相違」「法律的、倫理的課題とACP」「意思決定支援」「人工的水分・栄養補給法の問題」「人材育成」「重度認知症高齢者の予後関連因子」「胃ろう造設への反応」「若年性認知症者に関する、認知症ケアに関する倫理的課題」「認知症末期におけるケア」「痛みへのケアや看取りについての事例報告」などであった。

D．考察

文献検討より、認知症者へのEOLケアの在り方として、①支援者が「よかれ」と思って行っているケア場面において多様な倫理的課題が存在していることを認識すること、②認知症の経過や重症度によらず、認知症者自身が医療やケアを選択することを前提に支援するといった支援者の姿勢が必要であること、③末期に移行した認知症者にとってケアの大半が日常生活援助となるため、丁寧な日常生活援助が緩和ケアであり、それが尊厳の保持につながり、そのような環境で過ごすことが認知症者と家族双方にとっての満足につながることがあげられると考える。

さらに、このようなEOLケアを実践できる人材育成についても必要であると考える。

E．結論

認知症者へのEOLケアの在り方から、今後、具体的な支援や人材育成の方法などの検討が必要である。

F．研究発表

該当なし

G．知的財産権の出願・登録状況

該当なし